

森田 孟，鷺津浩子（文芸・言語学系）

・アメリカ文学とテクノロジー・筑波大学アメリカ文学会，2002

[中央本学，中央 939.02-W44]

守屋正彦（芸術学系）

・定本・武田信玄：21世紀の戦国大名論 / 萩原三雄，笹本正治編．高志書院，2002

[中央 210.47-Ta59]

古田博司（社会科学系）

・韓国学のすべて / 小倉紀蔵共編．新書館，2002 [中央 302.21-F94]

若林幹夫（社会科学系）

・漱石のリアル：測量としての文学．紀伊國屋書店，2002 [中央 910.268-N58]



私の一冊

古田 博司 編

『韓国学のすべて』

（新書館）



「韓国学」とは，韓国朝鮮に関する人文・社会科学的研究を通称する用語で，この書はその政治・行政，経済，歴史，社会，思想・宗教，文化，北朝鮮関連，日韓関係，の各分野について，15人の執筆者たちによって書かれています。彼らのほとんどは1960年以降生まれの若手ばかりで，新世紀にふさわしいグローバル化時代の陣容となっているのも特徴的です。

このようなハンドブックは企画力が勝負ですが，現在と歴史がバランスよく，しかも最近の情報を網羅しており，学問的な水準を保ちつつ，とてもわかりやすい内容になっているのがお勧めの点でしょうか。

例えば，序では韓国に限らず東アジア全体に当てはまる議論を扱っており，本書の広いパースペ

クティブを示すと同時に，経済では研究史の流れを追いつつ，開発経済の問題点にも触れ，社会ではジェンダー研究から観光社会学まで幅広く，文化では古典文化から現代の大衆文化まで，堰を切ったように若手たちの煌めく才能があふれ出しています。

各項目とも過不足ない研究レビューであると同時に，筆者それぞれの持ち味が生かされており，韓国朝鮮研究の新地平を開くものとして大いに期待されています。

また，事項の間に興味深いコラムが鑲められ，「なぜ韓国でキリスト教が普及したのか」とか「韓国のいじめは日本とどう違うのか」とか「韓国の博士号は濫発されているか」など，肩のこらない，しかし有意義な知識が，楽しみながら得られるような工夫もなされています。

本書は，本年5月の発売以来，既に半年で4000部近くを売り切りました。各界の人々から評価と賞賛をもって迎えられ，一層の普及が期待される韓国朝鮮研究の良書と目されています。

（ふるた・ひろし 社会科学系教授）